

特集・日本文化——その成り立ち

対談

日本文化の多様な構造

エスノグラフィ
民族誌の古層をめぐる

東北芸術工科大学教授

赤坂 憲雄

桃山学院大学名誉教授

沖浦 和光

- 1 戦前国定教科書の「東北」観
- 2 佐渡でみる文化の多層性
- 3 縄文人・アニミズム・自然神
- 4 「文化」の基層と「民族」の多層性

- 4 先住民族問題とアイデンティティ
 - 5 律令制国家と先住民族
 - 6 流配された俘囚はどうなったか
- まとめ 弥生文化の多層性と渡来人

1

戦前国定教科書の「東北」観

——「日本文化の多様な構造」ということを考えるときに、まあこれは「多様」というよりは「多層」という風に捉えたほうが良いかも知れないんですが、赤坂さんは、長らく東北をフィールドにして、「いくつもの日本」というテーマを追求してこられた。沖浦さんは、西日本から、南方系海洋民の流れや被差別民の歴史を中心として、「辺界と周縁の文化」を今まで探求してこられた。

そうした東北日本と南西日本、そのお二人に日本文化の多層性を論じて頂くというのが今日のテーマです。文化が多様であったということは、その担い手も多様であったわけで、とくに今回は、この列島の民族誌の基層に踏み込んで論じてもらいたい。

昨年、沖浦さんが佐渡に行かれて、大きな衝撃を受けたそうです。なぜかという、佐渡に、まさに日本文化の多様性、多層性を考える様々な要素が見出すことができた、

というお話でした。まずそのあたりから。

沖浦 ● 私は瀬戸内の海の民の家系で、祖父の代まで舟に乗っていました。瀬戸内の海民もいろんな流れがあるんですけども、先祖をずっとたどると、どうやら「隼人」系なんです。瀬戸内の村上水軍が祀ってたのが大山祇神おおくまのかみなのでですね。朝鮮からの渡来神という説もあるんですけども、『記』『紀』では黒潮に乗ってやってきた南方系の神です。それが瀬戸内海民の中心的な信仰で、大山祇神社がたくさん分布してる。

ところで、私のように関西で育った者にとっては、やっぱり北海道や東北は非常に遠いですね。戦前の時代では東京へ行くことも容易ではなかった。今では考えられないような距離感があった。東京からさらに北の地方は、遙かなる辺遠国、そういう感覚で見とつたわけです。

戦前の小学校で習ったイメージでは、やっぱり東北というのは、安倍比羅夫と坂上田村麻呂の「蝦夷」征伐ですね。野蛮で道徳をわきまえないエミシの住む国である。それから江戸時代の三大飢饉から、昭和恐慌のときの、女性の身売りが多いとかね。一口で言えば「辺境」のイメージですね。

赤坂 ● 東北が、飢饉と結ばれながら語られ始めたのは、実はそんなに古くないんですよ。近世の三大飢饉は別に東北だけじゃないんですね。それが明治以降になっても飢饉と

結びついていくのは、僕は東北の稲作化ということが非常に大きいと思う。

東北の北部を中心にフィールドワークをしていくようになるんですけども、下北半島などは、明治二〇年代では水田の九割くらいが稗田はいただった。それが、大正の終わりになるとほぼ一〇〇パーセント、稲に転換されていく。稗田は強靱な穀物でして、実は凶作や冷害に強いんですね。

だから風土にあった穀物だったんですけども、それを稲に転換するということが、国策として進められた。そのため、近代になっても東北は、特異な形で飢饉と結びつく、そういう背景が生まれたんじゃないか。身売りとかの問題もきわめて東北的に語られてしまうんですが、東北だけが強調されてきたというところに問題があるのではないか、という気がします。

沖浦 ● うん、それは西日本中心史観やと叩かれることは分かってますが(笑)、東北地方における農業形態の歴史的特殊性なんて、関西人にはあまり頭に入ってません。狩猟・漁撈問題を含めて、食べ物の問題は、自然や風土性と絡んで文化を決めるポイントになる。

その話はまた後で論じることにして、明治期からのエミシ論ですね、それが国定教科書で、どういうイメージでばら撒かれたかということについて、なにか調査研究がある

一九五三年、東京都生まれ。東京大学文学部卒業。東北芸術工科大学教授および同大学東北文化研究センター所長。二〇〇四年には、季刊誌『東北学』（柏書房）を創刊、編集に携わっている。著書に「異人論序説」、「排除の現象学」、「遠野／物語考」（以上、ちくま学芸文庫）、「山の精神史」、「漂泊の精神史」、「海」の精神史（以上、小学館）、「東北学」（三部作（作品社）、「物語からの風」、「国民民俗学を越えて」（五柳書院）、「柳田国男の読み方」（ちくま新書）、「山野河海まんだら」（筑摩書房）、「東西／南北考」（岩波新書）など多数。



んでしょうかね。

赤坂●少しずつやられてはいると思います。僕は、東北の各地域の歴史や文化は、重層的であると考えているんです。つまり、エミシの文化、狩猟・漁撈・採集文化につながるものは確実にそこにあって、その上に西の文化、弥生系の稲作農耕主体の文化がまだら模様にかぶさっている。

ですから、重層的に北の文化と西の文化が見出される。その論ずる人間の立脚点によって、東北論は北の色に染め上げることもできるし、西の色に染め上げることもできるんですね。

沖浦●いや、そのことはよく分かるんですけども、つまり私が言いたいのは、戦時中に、日本国民、当時は臣民ですな、それに植えつけられた東北観の根の深さですね。東北の立場から、国定教科書の編纂過程をいっぺん分析してもらいたい、そうすると、どういう東北観が……。

赤坂●今、ドキッとしたんですが、そんなに明治以降の教育の中で東北のマイナス・イメージが教えられてきたんですか。

沖浦●うん、それはすごい。僕たち関西人には東北は未知の地だったし、その生活や歴史を語ってくれる友達は、近辺には一人もいない。初めて東北に行ったのが一九六〇年代、もちろん旅行で通過しただけなんですけど、少年時代に抱いていたイメージと違ったわけですね。何だこれじゃあ、家並を見ても食べ物もそんなに違わんなあと。もつと違うと僕は思ってたんですわ。

僕は戦後すぐ、一九四七年に東京に出てきたときでも、



食べ物の味付けがえらい違うことに驚きました。東京の魚は瀬戸内海の魚と違う。大阪は牛肉やけど、関東は豚。それから市場や銭湯のあり方もね。ともかくいろんな点でね、(東の国)と(西の国)はやっぱ箱根越えると違う、と肌身で体験した。それじゃあ、もう一つ先の東北はどうなのか。戦争中の教育の延長線上でしか理解できなかった。赤坂●おそらく、そういう「国定教科書の中の東北」という研究はないと思いますね。東北向けに副読本が作られたりしていますけれども、その分析もあまりされていない。たとえば『新しい歴史教科書』で、東北がどのように出てくる

のか、何か所かあるんです。東北は常に征服される側としてのイメージを施され、身売りされる娘たちの東北とか、飢饉の東北とか、そういうことしか出てこない。

沖浦●だからそれは、戦争中のイメージを、そのまま引きずってる。関西の人で、東北まで実際に行ってる人は非常に少ない。行っても有名観光地だけでそれもカケ足じやないかな。

赤坂●その逆も言えますね。東北人で四国・九州まで行ってきちんと見ている人は少ないですよ。

2

佐渡でみる文化の多層性

沖浦●実は昨年、初めて佐渡に行きました。承久の乱では順徳上皇が流されて、日蓮が流され、世阿弥が流され、流刑の地であった。まあそれなりのイメージを持つとったんですけれども、行ってみて予想外のショックを受けた。私は瀬戸内海の島を見てもすけども、佐渡は非常に高い山があ

おきつら・かすてら

一九二七年大阪府生まれ。東京大学文学部卒。桃山学院大学名誉教授。専攻は比較文化論。社会思想史。主著に『近代前夜と人類史の未来』(日本評論社)、『天皇の国、國民の国』(弘文堂)、『日本文化の源流を探る』(解放出版社)、『竹の民俗誌』(瀬戸内の民俗誌)、『岩波新書』、『インドネシアの黄さん』(岩波書店)、『陰陽師の原像』(岩波書店)、『幻の漂泊民サンカ』(文春文庫)、『二〇〇六年春』(日本民衆文化の原郷)、『文春文庫』、『『悪所』の民俗誌』(文春新書)が刊行された。

る、一二〇〇メートルくらいあるのかな、でかいんですね。驚いて見てたら、後ろ側にも陸地があるんですね(笑)。

かつては大和や摂津、相模や越後、出羽などと同じく一つの「国」であったわけで、そのでかさにまず驚いた。まあ、縄文・弥生の遺跡から日蓮と世阿弥、さらに北一輝までセットである。最初に行った日蓮の流刑地ですけど、今はお寺になってますが、ここは墓場であつたと。墓場の上に庵を作つて屋根もない、風がビュービュー吹いて筵かぶつて震えていると、日蓮が出した手紙がそのまま張り出されていた。

赤坂●相川の金山はどうでしたか？

沖浦●佐渡金山もびつくりした。鉱山に非常に関心があるんで、関西の大森銀山や生野銀山にはよく行きましたが、佐渡の金山は、西日本とかなり違う。ずっと奥まで入つて、ジオラマで再現されてますけど、安土桃山時代からすごい開発がなされた。そこへ流人がたくさん連行されて来て水替人夫として酷使される。その様がなんともすさまじい。西日本の鉱山と比較検討する必要があると思ひました。

そこへ遊郭ができました、最初の遊女は熊野比丘尼ひくにな、だから一種の「アルキ巫女みこ」ですな。これがその後の傾城町けいせいの始まりであると、説明を聞きましてね。出雲の阿国も来てるんですね。まあ阿国も偽者がぎょうさん出ますんで、

本物が来たのかどうか、これは分らない。

金山、遊女町、それに北前船の寄港地。瀬戸内海の文化が、予想外にたくさん運ばれてきています。

世阿弥が書いたと言われる有名な能の「善知鳥うしろ」。東北の海の猟師が捕る、鳥なんですな。で、その善知鳥捕りの猟師が地獄へ落ち云々、というすごい曲なんですけども、その善知鳥神社は青森にある。それが相川の集落の氏さんなんです。その横に瀬戸内の民が祀る大山祇神社、それが並んでるんですね。ほほう、本州の一番北の神と、かたや薩摩半島の神と、両方が並んでるのにびつくりしました。

博物館で見えておりましたら渤海から、七五三年に来てい。渤海は高句麗の遺臣が建てた国なんですな。これが佐渡へ来とるんですね。それより前ですが、『紀』の欽明紀五年には一隻の船に乗った「肅慎人みしせんのひと」が佐渡に漂着している。北海道東部にいたオホーツク海系ですね。そういう点では、文化のクロスロード、十字路ではないか。

赤坂●先ほどの善知鳥神社と、大山祇神社とが並んで出てくるという話は、ある意味では佐渡の持っている地政学的な個性をはつきりと語っている。

佐渡の北側に粟島、飛鳥とあつて、飛鳥は何度か訪ねて、聞き書きもしているんですね。黒潮がずっと北上してきて、沖繩の北辺りで二本に分かれます。その一本は九州

の西海岸を巻くようにして、日本海に入ってくる。市川健夫さんが「青潮」と呼びたい、という風に言われているんです。

沖浦●黒潮から分かれた対馬暖流ですね。

赤坂●その青潮の流れで運ばれてきた文化がどういう風に残っているのか、とても気になっています。飛鳥には、例外なく神社の森に照葉樹林のタブの原生林がある。タブの木に対する信仰というのがどういう風に日本列島の中にあるのか、まだ調べ切れないんですが、佐渡にも神社の周りがあったらしい。

ここ二、三年、朝鮮の多島海を歩き始めているんです。すると、島によって神木になっている木が少しずつ違うんですけれども、樁であったり、タブであったりする。かつて折口信夫が『古代研究』の口絵表紙にタブの木の写真を載せている。つまり、僕が飛鳥で見た神社の森のタブってというのは、青潮に乗って南のほうからやってきた文化であり、その北限ですね。

また、実は飛鳥の漁業の中で一番重要なのはトビウオ、そしてイカ。トビウオ漁は南アジアにつながる文化であり、トビウオは焼いて干して、汁のダシにするんですね。

沖浦●ああ、それはインドネシアと一緒にです。その源流は東南アジア……。

それから、歴史博物館で見たら一〇〇以上の縄文遺跡があつて、非常に濃密な分布ですね。だから佐渡には、相当早くからヒトが入ってきた。

赤坂●丸木舟で移動してたんでしょか。

沖浦●どういう流れで、どう入ってきたのか。黒潮の流れで南方系も来てるし、日本海を渡ってやってきたかもしれない。佐渡よりずっと西になりますが、出雲神話に出てくるサノオノの伝説でも、新羅しんらと関わりがある。但馬に定住したアメノヒボコが率いた集団も、『記』『紀』では新羅の王子だったとされている。

出雲は穀倉地帯で、さらに鉄が出ますからね。だから丹波・丹後・但馬は、出雲の横に連続してずっとあつて、能登半島までつながります。九州に来た海洋民の安曇あつむや宗像むねがたの一団が、瀬戸内だけでなく、日本海沿いにずっと行つてる可能性も非常に強い。

赤坂●先ほど少し出たように渤海もやってきているわけですから……。

沖浦●日本列島で、哺乳類サル目ヒト科が発生したわけはない。それで、ヒトがこの列島に移動してきたのは、どこからか。これは人類学の尾本さんに聞いても、数万年前の人間はまだ発掘されていないから決め手はまだない。

いつ頃からこの列島にヒトはいたのか。一〇万年前頃じ

やないか、尾本さんの推定では、まずそれくらいと言っているんじゃないかと。やってきたのは大陸から。朝鮮半島か、シベリア大陸か。日本列島がユーラシア大陸から離れたのは二万年ほど前だから、それまでは地続きで歩いてきた。

最初はナウマン象やオオツノ鹿なんかを追っかけて渡って来た。これは埴原和郎『日本人の起源』（朝日選書、一九八四）の計算なんだけど、ナウマン象一頭倒すと、だいたい五〇人の集団で四〇日生きる肉が手に入る。骨と牙と毛皮で生活できる。今でも瀬戸内海で網に引っかかります。DNAで鑑定すると三、四万年前のものが多。

『記』『紀』の天孫降臨神話でも、天から降りてきた、地から湧いたとは書いてない（笑）。降りてきたのは高千穂の峰で、『記』では、地上に降り立ったニギハヤヒは「ここは韓国（な）に向かい……朝日の直（な）さす国……」とある。

赤坂●やはり朝鮮から九州へというコースですね。

沖浦●人骨の研究で九州大の人類学教室が中心的役割を果たしてきた。弥生人の人骨が今一番たくさん出土しているのは、下関から博多湾にかけての海岸ですね。縄文系と比べて弥生人は地域差が大きい。大陸からの弥生系なのか、あるいは縄文と弥生の混交系なのか。北九州と南九州はかなり違う。この研究が進んでいます。

赤坂●『風土記』に出てくる土蜘蛛ですが、やはり先住民

系ですか。

沖浦●『記』『紀』『風土記』などの古文獻を丹念に探ると、この本州と九州だけでも数十カ所に土蜘蛛がいたと記されています。

『常陸風土記』『肥後風土記』『豊後風土記』に多く見え、土蜘蛛の分布地域は、日向・肥後・肥前・豊後・摂津・大和・越後・常陸・陸奥の九カ国にわたっている。ヤマト王朝の足元の大和の国だけではなく、西は日向から東は陸奥に及ぶ広範囲に散在していたようです。

赤坂●あちこちにいたわけですね。

沖浦●諸国の風土記を読みますと、地方によって土蜘蛛の記述にそれなりの特色があります。編纂者の「土蜘蛛」観や、その土地の古老の旧聞によって、記事もかなり違っていたと考えられます。地方によっては、国柄（な）、あるいは越後では八掬脛（やつかはぎ）と呼ばれています。

彼らはおしなべてヤマト王朝に反抗的であって、ほとんどが誅され殺害されています。中には帰順の意を表して朝貢を誓う者もいましたが、それは少数でした。

赤坂●どうやら縄文人のようですね。

沖浦●ええ、『紀』では、土蜘蛛は「身短くして足長し」とされている。身長が低く手足が長い。形態人類学では、縄文系の人骨は、弥生系よりも背が低く、胴が短く手足は長い

が特徴とされている。そのようにみれば、土蜘蛛、国栖、八東脛やつかはきと呼ばれた人びとは、縄文人の系譜に連なる身体的形質を持つていたと考えられますね。

この広い列島に散在していた縄文人には、それなりの地域的な特色があったのではないか。

縄文時代の後・晩期の人骨の分析結果から考えても、縄文人がすべて同系の均質な集団であつたわけではない。自然環境的な要因をはじめ、狩猟・漁撈などの自然採取を中心とした遊動生活から、しだいに定住化に向かつた縄文人の生活形態や労働条件の変化なども考慮しなければなりませんね。

3

縄文人・アニミズム・自然神

沖浦●私が住んでいる河内から、熊野は三、四時間で行けますので、よく訪れます。『紀』の神武天皇東征伝では、難波なみので長髓彦ながすねひこに敗れた東征軍は、紀伊半島を迂回して、熊野に上陸した。そのときに抵抗したのが丹敷戸にしきと畔べで、その地の先住民で女性の首長です。それを誅殺したら、「熊野の山の荒ぶる神」である「熊」が現れて、神武軍は一時は総倒れになった。

この熊は先住民のトータルテーマですね。それを退治してから谷

沿いに大和へ北上した。「皇師、中州に趣かむとす、而るを山の中嶮絶して、復また行くべき路なし」(巻第三)とあります。

その途中には先住民である土蜘蛛が蟠踞たががらすして行くと手を塞ぎ、八咫鴉やたがらすの先導によつてようやく大和への脱出に成功したと物語る。長髓彦は在地の土蜘蛛集団のリーダーですね。

赤坂●なるほど、熊ですか。

沖浦●朝廷貴族は中世にはいると、死穢・産穢・血穢の三不浄をタブーとする法を制定して、ケガレに関わる民や女人の参詣を禁じました。しかし、熊野三山は、障害者や女人の参詣に門戸を開いていた。

このことは、熊野信仰が、山の民や川の民のアニミズム(animism)に起源があり、自然採取の狩猟文化の伝統の中で育まれてきたことと深い関係がある。「熊野権現御垂垂縁起」では、熊野千与定という犬飼の男が、本宮の大湯原で射た猪を食べたところ、この猪(一説には熊)を媒介として阿弥陀如来が出現したと説かれています。

また『一遍上人絵伝』では、一遍が参詣した際に、熊野権現が証誠殿の前に山伏姿で現れ「信不信を選ばず、浄・不浄を嫌わずその札を配るべし」と夢告を受けた。そういう有名な話があります。

中世の河原者が広めた説経節『をぐり』では、癩者(ハンセン病)になった餓鬼阿弥の小栗判官が、湯の峯温泉に

入って本復した話が出てきます。

赤坂●大きな熊が出て皇軍を倒したという話ですね。それで熊が熊野の先住民のトーテム的な役割を持っていたんじゃないかと言われたんですが、たとえば縄文時代の土器とか、道具の中に熊が造形として出てくる。その熊が「イオマンテ」、熊送りの儀礼に見られるアイヌの文化の問題とどのようにつながっているのか。

最近熊祭りのなものは北のオホーツク海文化から入り込んだんじゃないかという解釈もあるので、その熊祭りの源流が縄文まで辿れるのか。よくわからないところがあるんですが、熊を森の主のように崇める信仰は、確実に北のアジアにつながっている。

沖浦●戦前の熊野研究では、熊野地方の先住民はアイヌ系ではないか、という説もあつたんですね。

赤坂●そうですね。それから僕がとても気になったのは、熊野が浄・不浄を嫌わずということ、女性のケガレとか、ハンセン病の問題とかに対して、非常に寛容である。そのことが、どういう意味合いを持つのかということ。たとえば縄文文化の一つの個性として、ケガレを忌み遠ざけるタブーが希薄な文化だったのではないかと想像しています。

沖浦●なるほどね。

赤坂●たとえばそれは、縄文中期の典型的な集落が円環状

をなして、その中心に共同墓地が営まれて、そこが祭りの場にもなっていた。集落の中心に、死者を囲い込む形になっており、その傍らに、生ける者たちが堅穴住居で暮らしている。つまり、死をケガレとして忌むことが少ない文化だったんじゃないか、そう僕は考えています。

これは弥生になるとはつきりするんですけども、弥生の環濠集落の中には墓はないんですね。一〇〇メートルくらい離れたところに、共同墓地を営む。つまり日常の場から死のケガレというものを遠ざけようとしたのは、弥生以降の文化だろうと僕は考えるんです。

そういう意味では、死・産・血のケガレといったものを、熊野が嫌わないということは、縄文まで辿っていけるのかもしれない。もう一つ付け加えておきますと、その縄文の堅穴住居の入り口の辺りに甕が埋葬されている例がある。その甕はどうやら出産にともなう胞衣えいか胎盤たいはん、あるいは幼くして亡くなった子供を納めて埋めている。

堅穴住居の中でお産が行われ、胎盤とかそういうものが、住居の入り口に納められるんですね。たとえば木下忠さんの『埋甕』なんかに見えているんですが、縄文的な伝統の強い地域で、その胞衣を家の土間や軒下といったきわめて日常の生活の場に近い所に埋める習俗が残っている。そういう議論に、どこかにつながってくると思うんですよ。

沖浦●僕はその説には賛成です。死や産、血のケガレを忌避しないという考えは、縄文系のアニミズムにつながっている。僕はアニミズム復権派なんですけども(笑)。

太陽や月の光、星の輝き、大地といった大自然の精霊ですな、海の神、山の神、森の神。それから多産と豊穰をもたらず女神だった地母神信仰も、縄文の土偶からうかがえる。それは裸型の性器がシンボルなんです。

縄文人のアニミズムは、人格神じゃなかった、自然神だった。熊野なんかはね、明らかに縄文系の根っこが残っている。

もう一つ僕が大事だと思うのは、熊野と似たのが、この列島の奥深い山中のあちこちにあること。高千穂がそうですね。生贄を神に捧げるんです。高千穂神社の一二月の祭礼、確か猪一六匹殺して、その血を捧げるんです。その次に猪を背負ってどこへ参るかというと、本社すぐ下に滅ぼされた先住民の「鬼八」の墓がありまして、そこへ捧げる。同じような儀礼が諏訪大社などにも残っている。生贄を神に捧げて、神前共食をやったのでしょ。血をすすり肉を食って、コミュニティの団結を固めた。

赤坂●柳田の『後狩詞記』に収められた伝承では、山の神がお産で苦しんでいるのを、助けなかった猟師には幸が与えられずにお産のケガレのタブーを恐れずに助けた猟師には、豊かな山の幸が与えられているんですね。その伝承は明ら

かに、お産のケガレを恐れない人たちの姿を示している。

それから、『風土記』の土蜘蛛伝承を拾ってみると、女性が多いんですね。「何々ヒメ」とか、土地の首長として女性が登場することが多いです。つまり、卑弥呼的な女性のシャーマン。シャーマンであり首長であるという女性たちの姿が、『風土記』の背後にはかなり濃密に見え隠れしている。あるいは、姉と弟の組み合わせの首长制である、ヒメ・ヒコ制で出てきますね。

沖浦●縄文の時代は、地域差はあったとしても、母系性だったのでしょうか。月のモノがあり、子を産む女性が聖なる存在で、それが地母神信仰として表象された……。陰陽の形そのものが、大地に宿る生命力の神格化された姿だった。

赤坂●日本列島の先住民問題を考えるときに、縄文文化が多様なものであったという議論が前提として置かれたいいけない。つまり、土蜘蛛系の先住民、エミシ系の先住民、隼人系の先住民、恐らくそれぞれの背景はずいぶん違う。

これまでの議論は、大和の王権によって征服された先住民、ということで一括りだったんですね。そういう議論に対して、縄文文化の地域的な多様性をきちんと押さえておく必要があるんじゃないですか。

沖浦●そうですね。この列島の縄文時代では、人口の地域差は非常に大きく、東高西低ですね。小山修三さんの推計

では、東日本が圧倒的に多数です。弥生時代に入る頃から、西日本は急激に増えてくるが、そのかなりの部分は大陸、それも朝鮮半島からやってきた集団と考えられる。

4

「文化」の基層と「民族」の多様性

赤坂●それでちよっと話を転がしますと、二年前に鹿児島
の国分市の上野原遺跡を訪ねたんですね。あれは九五〇〇
年前の、初めて定住生活が確認された遺跡なんです、そ
の資料館に行つたときにびっくりしました。

入つてすぐに土器が並んでいまして、一つの立派な土
器が周りに他の土器を従えるように置いてあつた。よく
見るとそれだけが「縄文」土器という説明なんです。で
も、後ろに並んでいるのは貝殻紋になつている。それで僕
は学芸員に尋ねたんです、この辺りでは「縄文」土器はど
のくらい出ますか、と。驚いたんですけれども、まあ数パ
ーセントですかね、と言うんです。全体の数パーセントだ
けが「縄文」で、あとは貝殻紋とか、他の模様だと言うん
ですよね。

つまり、「縄文」土器という言葉が、非常に強い呪力を持
つて一万年の時間を覆い尽くしている。それが縄文時代の
文化的な多様性というものを覆い隠すかたちで、一つの縄

文文化というイメージが作られてきたんじゃないか。

沖繩に行きますと同時代はみな貝殻紋ですからね。それ
にもかかわらず、「縄文時代の沖繩」ということで議論され
て、あれは縄文文化の一つのバリエーションである、とい
うような言い方が疑われることもなくなされている。

つまり、我々が縄文文化を語るときに、無意識に今ある
「日本という国家」の国境で囲つておいて、その中に見出
される新石器時代の文化的要素の中の共通性を取り出して
「縄文時代」つて名づけているだけなんじゃないか。

そうした国境を取り外して、たとえば、沿海州から朝
鮮半島や沖繩、北のシベリアのほうまで、ニユートラル
な眼で眺めていったときに、いったいどこに境界が引け
るのか。

ですから、考古学者に対して、縄文文化という概念は本
当に支え切れると思いませんか、と僕は疑問を突きつけるん
ですが、まだちよっと届かないですね。でも、僕はいずれ
縄文文化という言葉が、支え切れなくなる状況が生まれ
くると思えますね。

沖浦●賛成ですね。広い沖繩だけでも、「奄美諸島」、「沖繩
本島」の周辺、そして八重山諸島と宮古諸島を含む「先島諸
島」——ざっとみても三つの文化圏がある。それなのにどこ
まで縄文文化が南下したか、というような言い方でしょう。

中国大陸との交流。黒潮に乗って北上してきた南太平洋系の文化の影響。言語や信仰や民俗の面でも、いわゆる琉球文化の古層はすごいですよ。いろんなモノサシがないと計れない。

赤坂●「縄文文化」「弥生文化」「古墳文化」とか、すべて「文化」という言葉で括っているじゃないですか、これが問題を曖昧にできたんじゃないか。

「縄文文化」を支えた民族的、種族的な多様性みたいなものをいけば括弧に括っておいて、一つの「縄文文化」があります、という風に言うじゃないですか。その民族的、種族的な多様性は、決して議論に組み込まない。そのために僕は「文化」という言葉が使われてきたんじゃないか、という気がしてしまってますね。

沖浦●やはり、大和王朝以来の「国家」意識というか、ナシヨナリズム文化論が根底にある……。

赤坂●次に話題になると思うんですが、「弥生文化」というのも、それを支えた人たちは非常に民族的に多様である。沖浦さんも言われてましたね。そういう議論をpushさえないかのために、「文化」という言葉が使われてきたんじゃないかという気がしちゃってますね。

沖浦●ええ、縄文人と比べても、弥生人のほうが地域差が大きく、ヒトとしての形質も多様だったと、人類学者は言

っていますね。

赤坂●それは言語の問題にも間違いなくつながると僕は思います。たとえば、縄文語の復元作業が行われていますね。言語学者たちが、縄文人がどういう言葉をしゃべっていたのか、それを復元するときに、東北の方言を核に据えて、縄文語というものを復元しようとする。それは僕は正しいと思うんですけども、でも彼らはアイヌ語を視野の外に括り出すんですね。

つまり、金田一京助以来、アイヌ語と日本語は断絶しているという議論が前提としてありますから。そのくせ、あるところまでは考古学の現代の知見を利用するんです。つまり、縄文文化の最も古層につながる東北の言葉を基礎にして、縄文語を復元しようとする。でも、決してアイヌ語にはいかなんですね。現代の考古学的・人類学的な知見から言えば、アイヌの人びとこそ縄文の直系の子孫であるということとは明らかになってきている。それにも関わらず、言語学の人たちはアイヌ語を絶対に視野に組み込まないんですね。

沖浦●これは奈良時代の言い方ですが、『紀』では韓語を「からさえずり」と呼んでますね。日本語の成立自体がまだ確定してないでしょう？ 大野(晋)さんみたいにインドから渡って来たと言う人もあるし、ウラル・アルタイ系じゃな

いかと言う人もいる。村山七郎さんみたいに南島語、オー
ストロネシア語が根本にある、それはアイヌ語に連なっ
ているという説もある。私は村山説に賛成なんでね。

言語学でもまだバラバラの状態です。尾本さんがチーフ
になって日文研で「日本人と日本文化の起原に関する学際
的研究」という大プロジェクトをやったときも、四部門あ
るが、言語がない。これおかしいんじゃないですか、と尾本
さんに言うたんです。日本人のルーツを探るプロジェクト
に言語が入ってない。これをやったらね、侃々諤々になっ
てまとまらなくなってしまおうという話でした。

5

先住民問題とアイデンティティ

赤坂●鹿児島では、薩摩隼人という言葉をも自分たちのアイ
デンティティを語るために使ってますね。でも、東北では
決して「伊達エミシ」とか「津軽エミシ」というような言い方
はされないんですよ。

エミシは、今ここに暮らしている自分たち東北人とは切
れた人たちである、先祖ではないという風に思い込んでい
るんです。

それは、エミシと呼ばれた人々が大和王権によって、数
百年の戦争の末に征服されていく、その記憶のあり方が隼

人の場合の記憶と違うのではないか、と僕は感じてきたん
です。

沖浦●それはね、僕が最初に言った国定教科書のエミシ・
イメージ、その残像がまだあるからエミシとはつながりた
くないと。大和王朝と対立した逆賊で、「毛人」とよばれて
いた人たちと一緒にされたらかなわんという……。

赤坂●僕の友人で岩手の人もそうなんですけど、おじいさん
にお前はエミシの末裔だから誇りを持って生きろ、と教え
られて育ったといった人たちは確実にいます。でも、主流
派はエミシと自分たちは断絶している、自分たちは柳田が
「雪国の春」で語ったように、西から稲を携えて北へ北へと
移住してきた、日本人の子孫であるという、そういういったあ
るイメージに自分を寄り添わせようとする。ですから、縄
文なんて嫌いなんですよ。エミシも嫌いなんですよ。

でも、三内丸山のような壮大なものが出てくると、あ、
いいかもしれないと。それで九〇年代から東北人は許し
始めた、揺らぎだしたんですね。ついこの間まで、縄文の
遺跡の前には「先住民の住居跡」と書いてあったんです
ね。自分たちとは切れているという種のある種のメッセー
ジがそこにはあった。だから研究という面でも非常に遅れ
ている。

沖浦●それとよく似た例でね、大和でも土蜘蛛が出てきた

岩押分いわおしわくという有名な史蹟が吉野にある。神武の遠征軍が通りかかったときに、押し開けたら先住民・土蜘蛛が出てきたというごつごつ岩です。そこに「これは古事記に出てくる、先住民が住んでいた岩である」と表示してあった。

ところが次に行ったらありません。前の茶店のおばちゃんに聞いてみたら、「あの表示板では、我々が土蜘蛛の子孫だと誤解される、教育委員会が建てただけで、四〇軒のムラで申し込んで撤回してもらった」と。いや、あんなもと引つ付けられたらかなわんと。

そこは昔の「宿」なんです。おそらく中世の頃からの「宿」で、無料で泊まれる質素な小屋があった。明治に入っても旅人や香具師かぐし、行商人、乞食が泊まっていた。そこから熊野へ抜けるわけです。だから僕、そこへもういつべん建てに行つたらかいな、と思つてます(笑)。

赤坂●そのためには、土蜘蛛の歴史を、誇りを持って語れるようにならないと(笑)。

沖浦●日本史でも、土蜘蛛を語ってる人は、今はおりません。だから私は語り続けると言うてるんだけど(笑)。「大和風土記」と「紀伊風土記」が失われている。もしこれが残っていたら、土蜘蛛の伝承がたくさん出ていたのではないかと、非常に残念なんです。

赤坂●「土蜘蛛」「国栖」については、弥生・古墳時代を含め

て、大和王朝形成期の研究が画期的に進んだ戦後でも、ほとんど研究の対象になっていないのが現状ですね。

沖浦●戦前の一九一〇年代から二〇年代にかけての文献を読み返してみると、この列島の先住民問題は学会で盛んに論じられたテーマだったんですね。

論争のポイントの一つは、縄文時代から弥生時代への進展を踏まえて、この列島の先住民はどのような系統に分類できるのかということにあった。特に「蝦夷」と「土蜘蛛」とは別系統の先住民なのかどうかという問題が争点になっていました。人類学の鳥居龍藏、古代史の喜田貞吉らのすぐれた研究者が最前線に立って、活発な論争を繰り広げていたんです。柳田国男の(山人)論もその影響を受けている。

6

律令制国家と先住民族

赤坂●今のお話の中でつながっていくと思うんですけど、先住民の芸能は、大和王権の宮廷儀礼の中に「倭人舞」はやとまい「国栖奏」くすのそうという形で取り込まれているわけです。ところが沖浦さんも指摘されているように、エミシ系の芸能は一切大和王権の正史の中には現れていない。この問題をどういう風に考えるべきなのか、とても気になるんですね。

それともう一つ、東北のエミシが俘囚ふしゅうとして日本全国に移住させられますよね。その問題をどのように考えたらいのか。

沖浦●大和朝廷は王化に浴せぬ「化外の民」、エミシに対しても隼人に対しても、硬軟両作戦でのぞんでいる。つまり同和・融和政策と、いうこときかんときは武力で攻め込むという両面作戦をやる。

七世紀に入る頃には、北部を除くと、東北の大部分は律令国家の朝貢制的支配の中に組み込まれた。けれども、八世紀からの律令制時代に入っても反乱は各地で起こった。律令制は、公地公民制で、租庸調と労役・軍役を課せられる。

赤坂●狩猟・採集を主としていたムラにとつては、それまでの生活形態ではやっていけない状況が生まれた。

沖浦●そして律令制は文書がタテマエですから、文字で記入せないかんわけです。ところが先住民は無文字社会。これを強制されたらたまったもんじゃやない。

赤坂●そうですね。

沖浦●『紀』の斉明紀五年(六五九)の記事では、エミシは三つに大別されています。「都加留つがる」というのは、東北北部の荒ぶる集団。そして「鹿蝦夷あらかみし」、これは依然として抵抗を続けてる化外の民。

「熟蝦夷にきえみし」は大和王朝の遠征軍の軍門に降って、服属儀礼をちゃんとおこなってる集団なんです。東北から都の朝廷まで出ていって、服属儀礼をやらされている。それについては『日本書紀』の敏達天皇一〇年(五八一)に見えます。そうすると賤視はしているが、一応は公民として扱う。その長には位階として従五位下くらいは与える。

一方ものすごく抵抗した側、例えば胆沢蝦夷いざさのアテルイとモレという二人の首領が五〇〇人の軍勢を率いて最後まで抵抗して、ついに軍門に下る。そして田村麻呂が河内まで引つ張ってくる。田村麻呂は助命を要請した。

坂上田村麻呂は東漢氏あまのつみの後裔で渡来人系なんです。彼はアテルイらを殺すのには反対だったが、八〇二年に河内で斬首される。助命嘆願に朝廷が応じなかつたのは、「野性獸心にして、反覆して定めなし」という理由ですね。反覆は「叛逆」の意ですね。

赤坂●そのところは、正史には敷衍しか出てこない。興味深いことにこの一〇年間、東北の小説家たちがアテルイを主人公にした小説を書き始めているんです。高橋克彦さんや熊谷達也さんですね。ところが、エミシの宗教・儀礼・芸能など、一切記録がないんです。

だから、妄想をたくましくして小説を作るんですけれども、その材料が決定的に欠落している。だからエミシ系の

信仰や芸能が朝廷の正史の中に全く見られないという問題は、実はとても大きくて、小説家たちも遂方に暮れている。

熊谷さんの『荒蝦夷』という小説などは、正史に書かれている「残虐で、野山を駆け獸を追いかけて、親兄弟まで殺し合いをしている」というようなイメージを、ある意味で裏返しにして、それでいいじゃないかという発想で作られた小説だったんですね。そのくらいエミシの生活実態や精神世界は正史には登場しない。

沖浦●ずっと狩猟採取の時代だったのだから、自然との結びつきは稲作農耕社会より深かった。山や森、川や海に精霊が坐すというアニミズム信仰は盛んだと思いますね。

赤坂●僕は考古学者たちに聞いたことがあるんです。東北の「柵」、いわば大和王権の前線基地ですね、それを一生懸命掘って、お金かけて立派に復元もしている。ところで、この柵の向こうにいたエミシの人たちはどんな暮らしをしていたんですか、と聞いたことがあるんです。すると知らないと言いますね。そんなもの掘っても、大したものを出てこないし、関心もないと。一〇年前はそういう状況でした。今は掘られるようになっていきますから、柵があった時代のエミシのムラが、ようやく少しずつ明らかにされつつある。

沖浦●芸能は盛んだったんじゃないか。アニミズムで生き

ていて、やはり神頼みでしょう。シャーマンもたくさんいたに違いない。アニミズム・シャーマニズム・トーテミズムとこの三つがワンセットになっていたはずですよ。これ抜きには、先史時代の先住民族の生活というのはありえない。

赤坂●そう思いますね。そこへ仏教を広めていったんですね。

沖浦●縄文晩期の亀ヶ岡遺跡での発掘品に代表されるような、豊富なデザインと数多くの器種を持つ土偶類、日本海沿いに多い火炎土器なんかもすごいですね。

赤坂●特に東北の考古学者は、戦後稲作の遺跡を発見する

●第三回「現代の理論・読者フォーラム・東京」

沖浦和光さんを招き開催

テーマ・「東アジアと日本の未来像」

——靖国問題と歴史認識をめぐって

講師 ● 沖浦和光（桃山学院大学名誉教授・本誌編集委員）

日時 ● 六月一七日（土）午後二時～五時

場所 ● 明治大学駿河台校舎研究棟第九会議室

JR「御茶ノ水」駅下車三分

地下鉄丸の内線「御茶ノ水」駅下車五分

参加費 ● 一〇〇〇円（資料代）★学生は無料

★交流・討論の場を設けます。読者の皆さんの多数のご参加を。

★お問い合わせは「フォーラム」運営委員会まで

電話 03-3262-8505 / FAX 03-3264-2483

ことに命を賭けていましたから。つまりは西のヤマト文化につながる文化を掘り起こすことによって、自分たちのアイデンティティを西へとつなげたかった。

沖浦●だからエミシ・エゾとは断絶させて、いかに西のヤマト文化と結びつけるかということを生懸命やってきたんですね。

7

流配された俘囚はどうなったか

赤坂●このことはいかがですか。エミシの俘囚で西国に連行された人たちがどうなったのか、大変気にかかる。『続日本紀』にもかなり記録があるでしょう。

沖浦●どこへ流配されたか、記録がある。どこに何名まで書いてあります。七七六年には、出羽の俘囚三五八人、陸奥の俘囚三九五人が九州に流されています。僕が一番興味持ったのは伊勢の国、伊勢神宮の横へ配属されて、武器を全部取られてますから夜中に泣わめいて抵抗したと。泣き声で抵抗したわけやね。そして伊勢神宮の神域を侵すと、ただちにこのエミシは確か近江へ移す、そういう記事があるわけです。

あっちこっちへたくさん流されて、そこで俘囚としてどうなったのか、記録がないのでよく分からない。先にみた

出羽の俘囚のうち七八人は諸司・参議に割当てて「賤となす」とある。奴婢ぬひですね。

赤坂●俘囚の一部はヤマト王権の軍隊に編入されていますね。

沖浦●よく知られているのが「佐伯部」。『紀』ではヤマトタケルが服属させた蝦夷を西国に移して古代の軍事的部民べんみんに編成したとあります。各地の佐伯直あたいが統率して朝廷に上番した。播磨・安芸・阿波・讃岐・伊予の五カ国です。

空海の家は、その流されてきた俘囚を扱う長で、讃岐の佐伯直だった。そのことは、史料でもはっきりしている。で、最澄の家は近江の渡来人系でしょう。空海が遣唐使船に乗って行くときも、帰ってくる時もストレートに都に入れないわけですね。何が引かかったのか。

赤坂●沖浦さんの「近代史における先住民問題」の中で、空海がエミシのことを非常に侮蔑的というか、鬼のような連中で、農耕もせず、衣類も身につけず明けても暮れても獣を追いかけて山で遊んでいる、という風に書いていますね。その空海がですか……。

沖浦●『空海全集』第一巻に出ています。これはよく引用されているんだけど、自分の友達の小野朝臣おのあそみ岑守のぼりが、陸奥守になって奥州へ旅立つときに送った歌なんです。これで空海のエミシ観が分かるわけです。耕田あそみせず、衣服を身につけず「麋鹿びろくを追い、羅刹らさつの流れであつて人の儔ともがらにあらず」とい

う。北辺に住むエミシのことを、空海は羅刹^{らせつ}悪鬼と言っている。先住民族を悪く言った人はいるけども、ここまで言った文人はそういないんじゃないか。

赤坂●もう一つ興味深いのは、七九八年の『類聚三代格』。これは九州に流されたエミシなんです、それが上奏文を出している。そのことを論評した官符ですね。それに「旧俗を存して、未だ野心を改めず。狩漁を業と為して、養蚕を知らず。加以^{しかのみならず}居住定まらず、浮遊すること雲の如し。調庸を徴^{はた}るに至りては、山野に逃散す」。こういう論評なんです。九州に移されたエミシもこういう状態でしたと。

沖浦●これは九州の山地、五木の子守唄のあたりじゃないかと思うんだけど(笑)。ここでは「浮遊」となっています、各地で反乱も起こしています。

赤坂●確か同じ時代の史料で、石上神宮の神域でこの俘囚たちが焼畑をして、その煙が神域を汚しているという記事があったと思うんですが、狩猟・漁撈・焼畑といった、彼らが東北から持ち込んできた生業のスタイルが文化的な衝突を起こしていたと思うんですね。そのことが後世の賤民差別の成立にどのように流れ込んでいくのかというのは、時間的にずいぶん隔たりがありますからストレートには論じられないけれども、僕は一つの可能性として考えておく

必要があると考えています。そういう意味で沖浦さんが言われたエミシの流配の問題というのは、とても気になっていたんですね。

沖浦●それは確かにあります。そういう家柄とか血筋がつながるといふことは別にして、そういういろんな先住民に対する野蛮視というか、差別の原構造みたいなのが、後世まで残った。自分たちは王化に浴して租庸調を納めてる民だと自負している……。その目線から先住民を見ると、狩猟や漁撈を中心に生きてきて、アニミズムの影をひいている人たちは「異俗人^{あだしくじびと}」である。そして彼らは、死・産・血のケガレにも結びついている。

だからそういう差別の源流が、日本史の中には地下水脈みたいに埋まってたんじゃないか。それが後世の賤民差別と、どこかで連なっていく。

まとめ 弥生文化の多様性と渡来人

赤坂●縄文文化は多様だということ論じてきたわけですが、弥生文化はある意味ではもつと多様で、多層構造でしよう。

沖浦●いわゆる弥生人も、その主力は朝鮮からの何波に分かれる波でしょう。弥生人も単一民族ではなく、その渡来

したルートも多様であった。

朝鮮からの渡来人も、その民族的系譜はさまざまです。北から順番にいうと、高句麗こうくりが一番先進国で、歴史的にもすごい背景がある。高句麗は女真族、北方系騎馬民族なんです。

百済の民は、もともと大陸の江南にいた倭人系が主力でしょう。しかし百済の王朝は高句麗系ですね。新羅は北方系の要素も含んだ日本海系文化。三者違うんですね。

こういう差異を抜きにして、「渡来人」を一括りにして語ることはできない。先ほどの三国と、あと伽耶かやですね。伽耶はやはり大和朝廷とつながりが強い。秦氏はたしなんかもそうです。新羅と大和朝廷はどうも最後まで仲が悪い

注目すべきは『日本書紀』の記述なんです。あれは正史でしょ。三分の一以上は中国や朝鮮三国の古典籍の引用です。それと記事のかなりの部分は、朝鮮の諸国から、誰が、何を携えて来たかという記事です。叙述の順序は、たいてい高句麗・百済・新羅・伽耶の順。高句麗の使者が五七〇年に越こしに漂着したときはもう大騒ぎ。早馬で知らせて、それで都まで飾り船を仕立てて彼らを迎えている。

赤坂・朝鮮からの文化でも実に多様なんですね。北や南からの文化の流れも入ってくる。海民や漁村の文化もかなり

多様ですね。

たとえば、血や産のケガレを非常に忌み嫌う漁村があるかと思うと、そんなタブーを持つてない家船えぶねのムラがある。いわば、女性のケガレを忌避する漁村の文化と、あまり忌避しない漁村の文化がまたら模様ようばうに分布している。

民俗学ではずいぶん問題にされてきたんだけど、産小屋という日常の場から産のケガレを遠ざけるための仕掛けが、西のほうの海岸沿いに多く分布している。ところが、その分布はたとえば沖縄には一切ない。

『肥前国風土記』の中に「白水郎あま」という海民あまが出てきますね。それを見ますと、鮑あまとか海藻を採っている、そして牛と馬に富んでいるという記録もあるんですね。

こうした記述は明らかに九州島の文化などに通じるものがある。その後の記述には「形は隼人に似て馬弓あま（騎射）を好み、そして言葉は俗人くじびとと異なっている」とも出てくる。

つまり九州の小さな地域、島の中にも、系統や種族を異にする文化というものが同居するような形ですであつたんじゃないか。そういう風に眺めていくと、さまざまな文化の流れが日本列島に及んでいて、それも多層を成して見出される。でも、そういうものは次々に消されていった。

つまり、種族文化的な多様性を一つの日本文化像に、しだいに落とし込んでいった。

沖浦 ● そうですね。この島々には「土蜘蛛」がたくさんいたとありますね。それと海民の「白水郎^{あま}」との関わりは明記されていませんが、白水郎は朝鮮半島の多島海から、ずっと早い時代にやってきた人たちだったとも考えられますね。

赤坂 ● 我々はこの近代一〇〇年の学問の流れの中で、いろんな多様性をそぎ落として、どこかに収斂させることを繰り返してきたんじゃないか。実は、それが同時に日本列島の外の世界、外の国や民族との比較という場面に影を落としている。つまり比較という方法そのものが、すでに政治の影を負わされている。

沖浦 ● それは同感ですね。明治期からの「国民国家」の形成過程で、ことさらに「日本人」の文化的同質性と民族の単一性を強調してきた。それを国定教科書では、アジアに冠たる「皇国^{すうこく}」のアイデンティティの基本に据えてきた。またぞろ、それを再現しようとして、「愛国」を自称するいかかわしいグループが出てきていますが……。

赤坂 ● 日本列島の文化がきわめて雑種交配的であり、多様な民族文化が重層する形で作られてきたんだということ、もう一度原点に立ち返って、きちんと認識しておかねばならない。

沖浦 ● それは明治近代国家形成のときに、天皇制を復活させて、律令制と見まごうような君主制を作って、片一方で

は文明開化を進める。この二つがセットにされたが、世界史に類例を見ない大実験をやったわけですよ。それを両輪にして、「八紘一字」をスローガンに「大和魂」で轟進した。そしてあの太平洋戦争を「聖戦」と自称した。その挙げ句の果てに、多くの民を殺し、結局は今の靖国問題に行き着いたんですね。

赤坂 ● 国家という枠組みは、あくまで政治的、人為的につくられたということですね。それに先んじて、民族と文化の問題を論じなければならない。

おそらく北の縄文と南の縄文は種族的な背景が異なっているんじゃないかと思えます。しかし、国民国家が生まれて以降の常識に多くの日本人は縛られている。いつも見ている地図は、日本という国家の現在の境界なんですね。その向こうに何があったかということをつねに視野に組み込まなければならぬと思いますね。

沖浦 ● 国民国家としての日本を前提とした議論を展開しているんでは、この列島の文化の成り立ちそのものが見えてきませんね。

編集部註記・両氏の対話は三時間余に及びましたので、全部を本誌に収録することはできませんでした。本特集に関連する部分だけを抽出して掲載したことをお断りしておきます。